

(2) ムギ

主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
萎縮病類 (SBWMV, BYMV, WYMV)	<p>①抵抗性品種を選ぶ。 コムギ縞萎縮病抵抗性強：きぬあかり</p> <p>②二条オオムギでは、特に被害が大きいので、発生ほ場では連作しない。</p> <p>③オオムギ縞萎縮病の発生する畑はコムギに、コムギ縞萎縮病の発生する畑は、オオムギに転作する。</p> <p>④萎縮病又は2～3種のウイルスの混在している畑では、3～4年ムギ以外の作物に転作する。</p> <p>⑤早播きをすると感染の期間及び機会が多くなるので、早播きをしない。</p> <p>⑥発病した場合は、窒素肥料を追肥して、茎数の確保を図る。</p> <p>【参考事項】 ムギの萎縮病類には、萎縮病、オオムギ縞萎縮病、コムギ縞萎縮病がある。いずれも病原ウイルスが土壌中に生息するポリミキサ菌によって媒介され、土壌伝染する。萎縮病の病原ウイルスは、オオムギ、コムギ、ライムギを侵す。発生ほ場では、3～4年残存するため、連作すると必ず多発する。二条オオムギが萎縮病と縞萎縮病に混合感染すると、特に被害が甚だしい。暖冬、多雨の年に発生が多い。</p>	<p>①作付け前に農薬を土壌混和する。 (例) フルアジナム水和剤（フロンサイドSC、フロンサイド水和剤） TPN粉剤（ダコソイル）（麦類（秋播））（縞萎縮病）</p>
赤かび病 (<i>Gibberella</i> , <i>Fusarium</i> , <i>Microdochium</i>)	<p>①品種により熟期分散を行って、被害の軽減を図る。</p> <p>②健全種子を使用する。</p> <p>③窒素肥料を過用しない。</p> <p>④刈り遅れないように適期に収穫を行う。</p> <p>⑤収穫後は、すきこみ等を行い適切に残渣処理を行う。</p> <p>【参考事項】 開花期から乳熟期に多雨、曇天が続くと多発する。被害麦粒は家畜に有害であるため、飼料にしない。病原菌は、麦稈、種子、稲わら、稲の刈株などで越冬する。罹病種子は発芽が不良である。開花始めとその1週間後に2回農薬散布する。この時期に雨天の続く時は、雨間を選んで農薬散布し、防除適期を逃さないよう注意する。</p>	<p>①出穂期から開花最盛期に防除する。 (例) チオファネートメチル水和剤（トップジンM水和剤） テブコナゾール水和剤（シルバキュアフロアブル）（小麦・大麦） プロピコナゾール乳剤（チルト乳剤25）（小麦・大麦） メトコナゾール水和剤（ワークアップフロアブル） ピジフルメトフェン水和剤（ミラビスフロアブル）（小麦・大麦）</p> <p>②ヒメトピウンカと同時に防除する場合は、出穂期から開花最盛期に農薬散布する。 (例) MEP・チオファネートメチル粉剤（スミトップM粉剤）</p>
赤さび病 (<i>Puccinia</i>)	<p>①窒素肥料の過用や晩期追肥を避ける。</p> <p>②畑の近くのこぼれ麦を除く。</p> <p>③過度な早播きは避ける。</p> <p>【参考事項】 ムギのさび病類には、黒さび病、黄さび病、オオムギ小さび病、コムギ赤さび病がある。暖冬の年に発生が多い。小さび病、赤さび病の初期発病が乳熟期以後なら農薬散布を要しない。</p>	<p>①茎立後～止葉期と開花期に2回防除する。 (例) アゾキシストロビン水和剤（アミスター20フロアブル）（小麦） ピジフルメトフェン水和剤（ミラビスフロアブル） 水和硫黄剤（イオウフロアブル、コロナフロアブル、サルファーゾル） テブコナゾール水和剤（シルバキュアフロアブル）（小麦） プロピコナゾール乳剤（チルト乳剤25）（小麦） メトコナゾール水和剤（ワークアップフロアブル）</p>
裸黒穂病 (<i>Ustilago</i>)	<p>①健全種子を使用する。</p> <p>②冷水温湯法を行う。 麦種子を5～6時間冷水に浸漬した後、50℃前後の温湯で2～3分間温める。次にオオムギ、ハダカムギは53℃、コムギは54℃の温湯に5分間浸漬した後、冷水で冷やす。</p> <p>③風呂温湯法を行う。 コムギは46℃、オオムギ、ハダカムギは42℃に調節した風呂湯に10時間浸漬する。この場合の温度は、1時間に1～1.5℃下がるよう火を消し、ふたをすかしておく。</p> <p>【参考事項】 花器感染し、種子で伝染する。</p>	<p>①種子消毒を行う。 (例) チウラム・ベノミル水和剤（ベンレートT水和剤20） トリフルミゾール水和剤（トリフミン水和剤）</p>

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
うどんこ病 (Blumeria)	①こぼれ麦を除く。 ②窒素肥料を過用しない。 ③晩播き、厚播きをしない。	①茎立後～止葉期と開花期に2回防除する。 (例) チオファネートメチル水和剤 (トップジンM水和剤) テブコナゾール水和剤 (シルバキュアフロアブル) (小麦・大麦) トリフルミゾール乳剤 (トリフミン乳剤) (小麦) プロピコナゾール乳剤 (チルト乳剤25) (小麦・大麦) メコトナゾール水和剤 (ワークアップフロアブル)
	【参考事項】 春が温暖で雨が多く、ムギが早くからよく繁茂した年に発病が多い。また、「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱いので注意する。発生が多い場合は、追加で薬剤防除を行う。	
条斑病 (Cephalosporium)	①健全種子を使用する。 ②早播きをしない。 ③多発地では、イネ科作物を4～5年作付けしない。 ④田畑輪換する。 ⑤被害麦わらなどは、処分する。 ⑥刈株からの感染を防ぐため、石灰10a当たり35kgを刈株とともに畦内に埋没し、夏期高温中に腐敗させる。 ⑦イネ科雑草にも感染するので、畑や道路の除草を行う。	①種子消毒を行う。 (例) チウラム・ベノミル水和剤 (ベンレートT水和剤20)
	【参考事項】 病原菌は、被害麦わら、種子、刈株、土壤中に4～5年生存する。また、家畜の体内を通っても死滅しない。	
黄斑病 (Pyrenophora)	①イワイノダイチ (小麦) 等の抵抗性品種を使用する。 ②連作を避け、水稲との輪作を行う。 ③収穫後は、残渣をすきこむ。	①茎立後～止葉期と開花期に2回防除する。 (例) アゾキシストロビン水和剤 (アミスター20フロアブル) (小麦) プロピコナゾール乳剤 (チルト乳剤25) (小麦) メコトナゾール水和剤 (ワークアップフロアブル)
	【参考事項】 罹病残差が第1次感染源となる。秋播き小麦では、12月から発病がみられる。発生が多い場合は、追加で薬剤防除を行う。	
ヒメトビウンカ		①5月上旬に防除する。 (例) エトフェンプロックス乳剤 (トレボンエア、トレボン乳剤) プロフェジン水和剤 (幼虫) (アプロード水和剤) (小麦) (アプロードゾル) ②赤かび病と同時に防除する場合は、出穂期から開花最盛期に農薬散布する。 (例) MEP・チオファネートメチル粉剤 (スミトップM粉剤)
	【参考事項】 麦畑で第1世代が発育する。第1世代成虫が水田へ移動して縞葉枯病を媒介する。本病の防除は第1世代を対象にするのが最も効果的である (イネの縞葉枯病、ヒメトビウンカの項参照)。	
アブラムシ類	①早播きをしない。	①発生初期から防除する。 (例) エトフェンプロックス乳剤 (トレボン乳剤) アセタミプリド水溶液 (モスピランSL液剤) MEP乳剤 (スミチオン乳剤) ②赤かび病と同時に防除する場合は、出穂期から開花最盛期に農薬散布する。 (例) MEP・チオファネートメチル粉剤 (スミトップM粉剤)
	【参考事項】 ムギヒゲナガアブラムシ、ムギクビレアブラムシ、トウモロコシアブラムシなどが寄生する。 早播き栽培や過繁茂状態で発生が多い。 春4～5月頃、雨が少なく、乾燥の続く年は発生が多い。	
ムギアカタマバエ	①既発生地及びその周辺では、コムギの連続栽培は避ける。	①出穂期から穂揃い期に防除する。 (例) MEP乳剤 (スミチオン乳剤) PAP粉剤 (エルサン粉剤2) (小麦) ②赤かび病と同時に防除する場合は、出穂期から開花最盛期に農薬散布する。 (例) MEP・チオファネートメチル粉剤 (スミトップM粉剤)
	【参考事項】 土中から出現した成虫が穂に産卵する。幼虫は子実を食害して育ち、収穫期に地面に落下して翌年の春まで土中に生息する。	